

## デカセギと家族(8)

—— 兄弟の成功物語・H 一家の場合 ——

樋 口 直 人 (徳島大学総合科学部)

稲 葉 奈々子 (茨城大学人文学部)

### 1. 問題の所在

いわゆる「高度人材」移民を除けば、移民第一世代のほとんどはマニュアル労働に従事する。そして移民第一世代にとってもっとも有望な上昇経路は、労働者から自営業者になることである。自営業といってもその規模はさまざまであり、先行研究では長時間労働や労働時間当たりの所得の低さなどが指摘されているが、社会経済的地位を向上させるもっとも有望な経路であることに変わりはないだろう。そうした観点から、1980年代以降の北米を中心としてエスニック・ビジネスの研究が進むようになっていく。研究の最盛期である1990年代ほどではないものの、現在でもエスニック・ビジネスは移民研究上の一大トピックであり続けている。

日本では、在日コリアンも老華僑も自営業従事比率が高いことは知られていたものの、エスニック・ビジネスという観点からの研究はほとんどない。エスニック・ビジネスどころか、経済活動に関わる研究が著しく立ち遅れており、自営業者の多さは就職差別の所産とされることが多かった。しかし、差別は自営業に従事するための誘因となりこそすれ、被差別集団がすべて自営業になれるわけではない。その意味で、自営業への集中を差別の結果とみなす議論では、なぜ自営業に進出できたのかという問いに答えられない。

現在の日本でも、そうした問いが移民研究上の意味ある論点として存在する。表は2005年国勢調査の結果であるが、韓国・朝鮮と他の国籍には自営業主・家族従業者の比率で大きな開きがある<sup>1</sup>。さらにニューカマーのなかでも開きがあり、研修・技能実習生が多くを占めるインドネシア国籍の自営業

主比率がもっとも低い。ただし、家族従業者まで含めればインドネシアとブラジル国籍では2.2%と並んで最下位になる。ペルー人はブラジル人よりやや高いものの、自営・家族従業者比率では下から3番目であり、低いことに変わりはない。

家族移民が可能なブラジル・ペルー国籍の人たちは、滞在資格や移民形態からすれば有利であるにもかかわらず、なぜ自営業従事比率が低いのか。そのひとつのヒントとして、フィリピン・タイ国籍に着目してみよう。通常、自営業主になるのは男性が多いとされ（家族経営ならば「業主」は男性になるため）、韓国・朝鮮、中国、ベトナム、ブラジル、ペルー国籍では男性の方が女性よりも自営業主が多くなっている。それとは対照的に、フィリピン人（男性2.1%、女性2.9%）とタイ人（男性3.6%、女性7.4%）では女性の自営業主比率のほうが高い。これは、両国籍の女性で日本人の配偶者が多く、日本人夫という社会関係資本があるため男性より自営業に進出しやすいという事情があるものと思われる。それに加えて、日本人の配偶者という永住を前提とした生活設計が自営業への志向を高めているともいえるだろう。

南米国籍の人たちのなかでは、永住を前提として居住する比率が低く、日本人を配偶者に行っている割合も低いと思われる。家族という社会関係資本があるとしても、ほとんどが工場での派遣労働という同質的な環境のもとで

表 外国人の国籍別・従業上の地位

		全 体					男					女				
		計	常 雇	臨時雇	家族従業者・不詳	自営業主	計	常 雇	臨時雇	家族従業者・不詳	自営業主	計	常 雇	臨時雇	家族従業者・不詳	自営業主
韓国,朝鮮	人数	225,888	113,929	31,061	39,022	41,876	126,217	63,207	11,698	21,388	29,924	99,671	50,722	19,363	17,634	11,952
	%	100.0	50.4	13.8	17.3	18.5	100.0	50.1	9.3	16.9	23.7	100.0	50.9	19.4	17.7	12.0
中 国	人数	185,738	119,131	48,184	11,859	6,564	80,784	52,354	18,381	6,106	3,943	104,954	66,777	29,803	5,753	2,621
	%	100.0	64.1	25.9	6.4	3.5	100.0	64.8	22.8	7.6	4.9	100.0	63.6	28.4	5.5	2.5
フィリピン	人数	64,185	33,351	26,494	2,611	1,729	15,152	9,866	4,752	221	313	49,033	23,485	21,742	2,390	1,416
	%	100.0	52.0	41.3	4.1	2.7	100.0	65.1	31.4	1.5	2.1	100.0	47.9	44.3	4.9	2.9
タ イ	人数	11,396	5,919	4,045	715	687	4,037	2,599	1,191	102	145	7,329	3,320	2,854	613	542
	%	100.0	52.1	35.6	6.3	6.0	100.0	64.4	29.5	2.5	3.6	100.0	45.3	38.9	8.4	7.4
インドネシア	人数	12,909	8,738	3,906	162	103	10,074	7,472	2,442	84	76	2,835	1,266	1,464	78	27
	%	100.0	67.7	30.3	1.3	0.8	100.0	74.2	24.2	0.8	0.8	100.0	44.7	51.6	2.8	1.0
ベトナム	人数	11,467	7,991	2,884	318	274	6,397	4,532	1,494	174	197	5,070	3,459	1,390	144	77
	%	100.0	69.7	25.2	2.8	2.4	100.0	70.8	23.4	2.7	3.1	100.0	68.2	27.4	7.8	1.5
ブラジル	人数	140,830	100,327	37,388	1,573	1,542	85,806	62,148	21,782	847	1,029	55,024	38,179	15,606	726	513
	%	100.0	71.2	26.5	1.1	1.1	100.0	72.4	25.4	1.0	1.2	100.0	69.4	28.4	1.3	0.9
ペ ル ー	人数	22,552	15,246	6,591	381	334	13,825	9,737	3,623	216	249	8,727	5,509	2,968	165	85
	%	100.0	67.6	29.2	1.7	1.5	100.0	70.4	26.2	1.6	1.8	100.0	63.1	34.0	1.9	1.0
全 体	人数	772,375	466,935	180,069	63,540	61,831	414,068	259,092	77,360	34,442	43,174	358,307	207,843	102,709	29,098	18,657
	%	100.0	60.5	23.3	8.2	8.0	100.0	62.6	18.7	8.3	10.4	100.0	58.0	28.7	8.1	5.2

出典：『平成17年国勢調査報告 外国人に関する特別集計結果』2008年

は、「弱い紐帯の強さ」を発揮できないのかもしれない。この点については、稿を改めて本格的に解明していくとして、本稿では兄弟で電設業を立ち上げ成功した例を紹介する<sup>2</sup>。

## 2. H一家について

H一家は、沖縄出身の一世である母親と父親、その3人の子どもと配偶者や子どもからなる。ブエノスアイレスで洗濯屋を営む両親の間に生まれた長男（以下、兄とする）、次男（以下、弟とする）、長女は全員デカセギを経験しており、弟は今でも日本に住んでいる。ただし長女は7ヶ月しか日本に行っておらず、現在はアルゼンチン南部に居住しているため聞き取りしていない。両親のうち、母親は日本に2回遊びに行っただけでデカセギ経験はなく、父親は祖父（父親の父親）の家を購入するため1回デカセギに行っている。母親の兄弟は全員が日本に行っており、1990年に母親の父親が亡くなったときには兄弟全員が日本にいて自分と妹しか世話できなかったため、非常に大変だったという<sup>3</sup>。

一家への聞き取りは、2008年12月に日本にいる弟に会い、その年の年末年始にブエノスアイレスで父親、母親、兄、伯父（母親の兄、義兄＝2人とも日本で一家と一緒に働いていた）に聞き取りした。2009年1月に日本で再度弟に会い、さらに2009年9月には兄と妻、その子どもにも聞き取りをした。

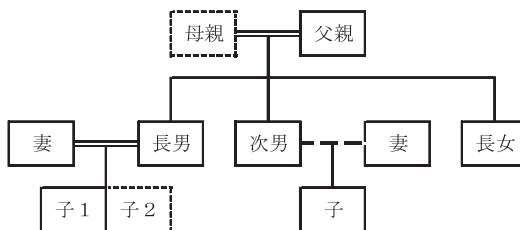


図 H一家の系図

注：実線で囲んだ者はデカセギ経験を持つか、日本居住を示しており、  
点線で囲まれている者はデカセギしていない。

### 3. 親子デカセギ期

父親と母親は今でも洗濯屋を営んでおり、日々の生活そのものはずっと不自由なく送れている。1980年代末のインフレの時には、一家で200～300ドルあれば1ヶ月の生活はできたが、店の売り上げではその程度の収入にしかならず、高いものを買うことができない。当時は、現在90歳になる父親の父親が老後を過ごせる家を3万6千ドルで買うことになり、そのための費用をキョウダイたちから借りたため、その翌年の1988年に借金を返済するためにデカセギに行った<sup>4</sup>。すでに父親の義兄（妻の兄）が横浜市鶴見の電設業で働いていたため、すぐそこで働くようになった。

弟は、その時点で工業中学をあと1年残して中退し、特に働くわけでもなく母方の伯父が全員デカセギに行く中で、伯母たちの家の力仕事や買い物を手伝って小遣いをもらう生活をしていた。そのため、父親はもう一度中学に戻ってやり直すか、日本で働くかどうかどちらかにしろと言い渡し、弟はデカセギを選び88年に渡日した<sup>5</sup>。大学に通っていた兄も、その翌年である89年に1年のつもりでデカセギに行っている。母方の伯父たちは、家族帯同のとき以外は大人の男性だけが鶴見で働いており、兄と弟もそうした「移住の文化」にのっとって行動したといえるだろう。

兄や弟の友人である二世たちは、ほとんどが同じ県内の湘南台の工場で働いていたが、H一家の場合は連鎖移民によって鶴見で全員が働いており、友人たちとは全く会わなかったという。鶴見と湘南台の違いは上昇移動の機会の違いでもあり、結果的に兄弟が長年鶴見で働いたことは、成功物語の前提条件となっている<sup>6</sup>。

渡日後、伯父2人、父親、兄弟2人は、同じ電設会社で働くようになったが、兄は渡航費用を自弁したものの弟は伯父に借りたという。これは、父親が貸すと甘えが出てしまうからという父親の配慮であったが、労働現場はもとから親子親戚でも別々だった。兄も弟も、ウチナーグチは親が家で話していたからある程度理解可能だったものの、日本語は全然できなかった。兄は英語で意思疎通をはかろうとしたものの、現場の上司にここは日本なんだか

ら日本語でしゃべれと一喝され、弟は沖縄出身の同僚にウチナーグチで仕事を教えてもらいながら日本語を習得している。

鶴見では、家族は一緒に働いていただけでなく、アパートも一緒に住んでいた。その後、兄は日本に来て半年後の90年3月にブエノスアイレスの弁護士事務所で働いていた交際相手呼び寄せ、日本で結婚して独立した。日本に行ってみたら、思ったよりずっと住みやすかったのもそのまま暮すことにしたという。しかし、それであおりを食ったのは弟であり、渡日当初は伯父たちと父親がいるなかで唯一の若者だったため、家事一切をやらされていた。漬物や甘い味付けの多い日本食を最初の3年間は受け付けなかったため、から揚げの作り方だけ母親に教えてもらい、鳥のから揚げばかり出していたという<sup>7</sup>。兄が来たと思ったらすぐに出て行ってまた下働きの身になり、伯父たちと衝突して結局会社の寮に入った。寮では日本語で答えないと無視されるため、日本語を必死で覚えていった。

この間、母親の両親が相次いで亡くなり、兄弟はそのたびにアルゼンチンに戻ったが、父親は日本で働き続けた。父親は日本で2年間働き、兄と弟の貯金からも出してもらい、借りていた住宅代の3万6千ドルが貯まったことと、自分の母親も病気になった（程なくして亡くなった）ので息子2人とアルゼンチンに戻った。その後、伯父たちは日本で長く働き、日本でマンションを買って家族で定住する伯父もいたが、父親はそれ以降デカセギには出ていない。父親の不在中も母親が1人で店をあけていたため、現在に至るまでずっと洗濯屋を営業している。

## 4. 日本での家族形成

### (1) 兄の場合

こうして父親は1990年にアルゼンチンに戻ったが、兄弟の滞日生活はそれから本格化していった。90年3月に渡日した兄の妻は、それから1ヶ月して彼女の姉と姉の友人と3人で朝6時から13時まで近所の製パン工場で働くようになった。しかし、パン工場では時給が低いし昼間に働きたかったのです

ぐに仕事をやめ、家の近所で求人の張り紙を出していたクリーニング工場で6ヶ月勤めたあと、兄の伯母に誘われて川崎の自動車部品配送センターで10ヶ月働いた<sup>8</sup>。妊娠して子どもが生まれる前の92年に仕事をやめており、それから2年間仕事をしていない。

その間、兄は最初に働いていた電設会社に2年間いた後、社長に命じられて別の電設会社に出向した。最初の会社では、「1ヶ月40日働いていた」というくらいよく働き（昼・夜を通して働くとも2日間の賃金換算になる）、最高で月給が45万円くらいだったという<sup>9</sup>。出向先では、最初の賃金が日給1万5千円でそれ以降2万円まで上がったため、月給は50～70万円まで上がっている。しかし、子どもが2歳になった94年には最初に働いていた電設会社の経営が悪くなり、給料が遅配されるようになった<sup>10</sup>。最終的には、95年にこの会社は倒産し、結局半年分の給料をもらえなかった。このように生活が不安定になったため、妻と子どもは94年にアルゼンチンに帰って両親と一緒に住むようにした。

最初の会社が倒産してから、兄は出向先と正式に雇用契約を結ぶようになり、それから2002年まで働き続ける。それで仕事も安定したため、96年には再び妻を呼び寄せて同居するようになった。妻も4歳になった子どもを保育園に預け、2年間化学工場で働いてから、子どもが小学校に上がったので半日仕事に切り替え、兄の伯母が働いていた近所のスーパーマーケットでパートの仕事をした。ここは、同僚がほとんど日本人しかいなかったし、そのうち仲良くなった人がいたので日本語をよく使って上達したという。

このように滞日生活は順調に進んでいたが、子どもが2年生になってしばらくしてから、妻と子どもはアルゼンチンに帰国している。将来的にはアルゼンチンに帰るつもりであり、子どもが大きくなってからでは日本に残ることになるため、8歳になったときにアルゼンチンに戻るようにした。当時、夫婦同士ではスペイン語で話していたものの、子どもは日本語しか話せないため、アルゼンチンでは日亜学院の1学年下に編入した。最初は毎日家庭教師のところに通って勉強で追いつくようにし、家では妻と義妹（兄の妹）と一緒にスペイン語の読み書きを教えた。日本から帰ってきてから、子どもは

日本語検定の3級に合格したものの、祖父母（兄の両親）と同居しなくなってからは日本語を使わなくなり、今ではだいたい忘れていているという。

## (2) 弟の場合

弟は、最初の電設会社で3年間働いてから、現場で知り合った日本人業者に誘われて1991年には東京の電設会社に転職した。沖縄出身者が社長だった前の電設会社とは異なり、この会社は内地出身の日本人の会社であり、日系人の従業員もいなかった。仕事はきちんとするが、やくざとの付き合いもある企業文化の中で働いていた。リースの高級車をあてがわれて「飴を与えられ」、社長の運転手のようになって毎日社長と行動を共にし、食事もいつも社長のおごりだった。やくざとマージャンをやるときにもついて行き、頭まで入れ墨を入れた人をみてやくざに興味を持った。それで毎日やくざ映画のビデオを借りて1、2本は鑑賞し、「なんだこの野郎」といったやくざ言葉を覚えたという。弟自身はもっと自分の時間が欲しかったが、家族的な会社で毎週日曜日には皆でソフトボールをやっていた。

最初の半年は鶴見から通い、それから半年は会社の倉庫の中にスペースをあてがわれ、そこに住んでいた。仕事はたくさんあるし、出張も多くて月給は80万円くらい、多いときには150万円まで達したという。そのため、友人を5人くらい呼び寄せてそこで働かせるようにもなり、中でも弟はよく働いたのかわいがられたが、プライベートな時間が全然なかった。朝は5時に起きてすべての機材をトラックに積む段取りから始め、夜は社長にずっとついていて。日曜日にも会社の人たちとソフトボールでは、自分の時間を持つことができない。そのため、会社をやめることを考えやめる正当な理由を探すようになっていった。

この会社で働くようになってから1年後には、当時の交際相手と一緒に住むようになり、結婚を考えるようになった。あるとき社長に呼ばれ、200万円を渡されてこれでアルゼンチンに2人で行き、「嫁にくれと行って来い」と言われたという。返すのはいつでもいいから、と。しかし、ここで受け取ってしまうと会社を抜けられないので、お金を借りずに結婚した。

勤めて2年たったとき、初めて大きな仕事を任されるようになった。このときには、社長に可愛がられるので嫉妬する者も出てくるようになったとい、社長の親戚である専務は特に嫉妬していたという。結局、大きな仕事をまかされているときの飲み会で、この専務が「10万円やるからお前のかみさんと一発やらせろ」というので、怒って専務を追い掛け回し、この事件を理由にこの会社をやめている。それから、元々仲がよかった最初の鶴見の電設会社に戻って働くようになるが、兄と同様に1995年に倒産するときには半年分の給料が不払いになった。これ以降、兄と一緒に兄の出向先の電設会社で働くようになり、2002年までずっとそうした生活が続くことになる。

1995年には日本で子どもが生まれるが、結果的には離婚して元妻と子どもはアルゼンチンで暮すようになった。アルゼンチンに戻って最初のうちは、子どもは日本に帰りたいといってきかなかったという。離婚しても、元妻と子どもの生活費を毎月2000ドル送っており、弟の実家（父親と母親の家）にも母子でしばしば訪れている<sup>11</sup>。ただし、離婚は兄と弟のその後の軌跡の分岐を生み出す最大の要因となった。

## 5. 起業へ

こうして同僚として共に働いていた兄弟だが、2002年には働いていた電設会社がまたしても倒産してしまう。このときも、最後の半年間は給料をもらえず、2人で800万円の手形を切られたが、倒産したためとりはぐれたという。倒産した時点で、元請の会社から2人で会社を始めるのならば仕事をまわすと言われ、起業を決意した<sup>12</sup>。もともと、電設会社で働いているときにも一人親方として独立したほうが高い収入を得られるので、元請に認めてくれと交渉したが、「仕事上の仁義」を守るため認められなかった。そうした経緯からすれば渡りに船の話であるが、当時の兄弟は1人400万円の給与収入が不払いになっていたため、貯金がなく自前で資金を捻出できなかった。そのため、起業に必要な300万円を借金して集め、7、8人の従業員を雇ってワゴン車を購入して体裁を整えた、仕事が始まったらすぐに借金を返済でき



たという。

この兄弟は、2002年までの10年近くを船の電気整備一筋で過ごしてきた。横浜港に寄港する船の点検整備で、豪華客船の飛鳥号のように毎年決まった時期に整備することも珍しくないという<sup>13</sup>。そのため、現場も安定して鶴見から自動車まで本牧まで通い、元請もずっと一緒だったため、ビル建設や地下のケーブル引きのような時限的な仕事とは異なり安定性がある。船の整備だけするため専門性も高く、それゆえ会社が倒産したときに元請から認知されていて声をかけられたものと思われる。公共事業やビル建設のように景気変動の影響も受けにくく、安定した需要のあるニッチに入り込めたわけである。

それから忙しいときには20名くらいを雇用し、兄弟も自ら毎日現場に通っていた。経営者としての取り分に加えて、自分たちの工賃も入るため、税金を払ってアルゼンチンに1人2000ドルずつ毎月送金しても、1ヶ月1人100万円くらいの手取りが残ったという。こうした起業経験について、こんなに儲かるものかと思った、と兄は述懐している。兄は働く分だけ遊ぼうと思い、寸暇を惜しんでいろいろなところに行っている。たとえば、土曜日の3時に仕事が終わったときには、川崎港に自分のバイクを預けて北海道に送り、自分は飛行機で一足先に行って札幌でラーメンを食べた<sup>14</sup>。日曜日にバイクを受け取ってツーリングし、同様に船でバイクを送って自らは飛行機で東京に戻り、月曜日から仕事をすることも何度もあるという。それでも、兄は共同経営していた3年間毎月50万円は貯金できたと述べている。2000ドルの送金を除いてそれだけ余剰が出たわけだから、起業が成功すればいかに生活が変わるかを物語っている。

## 6. 帰国と滞日の分岐、そして企業家精神

### (1) 兄の帰国

このように事業は順調に進み、兄はマンションを購入して両親と妻子を日本に呼び寄せようと考えた。当時は、駐車場代も入れて1ヶ月16万円の家賃

を払いながらマンションに一人暮らししており、高い家賃を払うならば事業もうまくいっているし自宅を購入して親を呼び寄せたほうがよいと思ったのである。しかし、両親も妻子も日本には住みたくないと思われ、少し悲しかったがいずれ帰らねばならないのなら、と2005年2月に単身帰国の途についた。それまでは、妻子と両親が同居していたが、祖父の家（9×50メートルの敷地に2つ平屋の家がある）の1つをリフォームして妻子と3人で住むようにした<sup>15</sup>。

本当は、それから1年間は休みながら様子を見て、自分の店を開くつもりだったという。さしあたりは貯金があるし、マンションを1つ購入して賃貸に出しているから、焦って店を始めるよりはアルゼンチンにいなかったブランクを取り戻したほうがよい<sup>16</sup>。まだ38歳だし5年間働いてアルゼンチンで芽が出なければ日本でまた働けばよい、そう思っているときにトヨタ自動車の販売店の仕事を紹介された。就職話を知らない子どもが「お父さんはトヨタで働くの」と予言するかのようなことを言っているのを聞き、これも何かの縁ではないかと思って帰国後4ヶ月した6月から販売店で働き始めた。

その販売店には30人強の社員がいたが、40あるトヨタの販売店のなかでも売上げは下位にあった。兄は不振の原因として社員の資質を挙げ、オーナーに訴えてサービス部門では18人中16人を解雇して入れ替えてもらった。そのうえで、歩合給を導入してサービスの徹底化を図ることで、会社の業績はのびたという。生産性も上がり、整備工にも2500ペソの給料が出せるようになった。その結果、2007年中にはオーナーの下に2人いる部長のうちの1人という待遇まで地位が上がり、最初に聞き取りをした2009年1月には月給が1万3000～5000ペソ（当時の円換算レートで32万5000～37万5000円）であった。最低賃金の10倍近い待遇であり、帰国4年後としてはきわめて成功したキャリア・パスをたどっているといえる<sup>17</sup>。

しかし、兄の心は揺れている。2009年1月に会ったときには、家賃収入とあわせて毎月1000ドル貯金できるし、日本でかつての倍の月給200万円になっても行くつもりはない、こちらで暮せるのならばそのほうがよいといっていた。それが、同年9月に会ったときには家族が同意してくれさえすれば日本

に行きたいと変わっていた。今の会社は収入も安定しているし仕事もうまくいっており、2人の部長のうち自分が上役になって会社のナンバー2になった。

とはいえ、あくまでトップはオーナーであり、方針が違ったときでもオーナーの意見が通る。結果的には自分の判断のほうがかいたい正しいが、雇われている以上は意思を通せない。かといって、自分で販売店を始めるには最低でも300万ドルくらいの資金が必要になる。要するに、もう社員としては行き着くところまで行ってしまい、面白くないという。仕事にしても、日本では約束したことは履行されるので計算がたつが、アルゼンチンではなかなか履行してくれないからスムーズにいかない。その意味で、いらいらすることが多い。

こうなると問題は収入ではなく、小さな店でもいいから自分で営んだほうがいいのでは、と兄はいう。本当は、前より収入が減ってもいいから日本に行って自分で会社を始め、また自分の可能性を試してみたい。自分で会社をやっているときは本当に楽しかった、と。兄と弟は、兄の帰国前に仲違い気味に別れたため、電話でも何年も話していない。しかし、兄のこうした感覚は以下でみるがごとく弟にも通じるものがあり、それは共通の経験がもたらす強烈な社会化の効果であるともいえる。

## (2) 弟の多角化

兄と異なり弟は長男ではないし、離婚しているためアルゼンチンにいる家族が強い帰国要素とはなりにくい。そのため、兄が帰国してからもずっと電設会社を経営するかたわら、事業の多角化を進めてきた（そのため今は全然貯金がない）。電設会社から出る安定した利益を投資にまわしており、2006年にはLEDやソーラーパネル、地震計の販売を始めた。これは、節電ブームで病院やスーパーマーケットへの導入が成功し、採算は取れているが、投資分の回収はこれからだという。最終的には、こうしたノウハウをアルゼンチンに持ち込み、販売するのが目標である。

それと並行して中国製の照明器具をアルゼンチンに輸出する仕事をアルゼ

ンチン側の共同経営者と始めたが、相手との関係が悪くなってすぐに撤退している。それに加えて、2008年からは国際電話カードの製造・販売も始めるようになった。これは、2003年から旅行業と共に進出を考えていたものだという。そのため、各地のラテンコミュニティで販売する代理人を求めてあちこちに出かけ、イベントの広告主になるなど前宣伝で忙しい。

現在は、こうした副業の立ち上げが忙しいため、電設の現場に出る頻度も低くなっている。調査時点で38歳だった弟は、40歳を過ぎたら現場仕事には出たくないという。伯父たちが日本でずっと現場仕事を60代になってもやっているのをみていてそう思うというが、その分だけ今はどんな仕事をどれだけやっても苦にはならない。今でも収入だけ考えれば投資をする必要はないが、金のためというより自分の可能性を試したいという気持ちが強い。筆者に彼を紹介してくれた友人は、滞日アルゼンチン人がビジネスに挑戦しないという不満を持っている点で弟と意気投合したと語っている。これを弟の側から言い換えれば、アルゼンチンで中学も卒業していない自分だってできるのだから、日本にいろいろとあるチャンスを生かせということになる。

だが、これは電設業のなかでも船の整備でずっと経験を積むことができたという幸運にかなりの程度規定されているともいえる。弟も、「電気屋は奥が深い、穴掘りから建物の電飾までいろいろある」というが、多くの仕事は熟練を必要としないケーブル引きや補助的な作業からなる。それに対して、一世の移民は技術を持たなくても日本語ができて南米の労働者を調達できるという強みにより、バブル時代に電設業に参入している。二世三世の場合、こうしたバブルの波に乗ることが出来たものはほとんどおらず、1995年に鶴見最大手の電設会社が倒産した時が起業の最初の波となる。それから、2000年以降の好景気に支えられた需要増により、さらに独立する第二の波が生じて現在に至っており、H兄弟は第二の波に該当する企業家といえる。

第二の波以降の独立で特徴的なのは、バブルの波とは異なり一定の技能を修得して多くは電気工事士の資格も取得した者が経営者になっていったことである。それは第三の波についても同様で、その意味で現場経験が技術形成に結び付き、それが南米系の経営者増という形で結実したともいえる。当然

のことながらそのように上昇経路をたどることができるのは少数で、H兄弟の場合も勤務していた会社が倒産して初めてチャンスが生じている。もっとも、会社の倒産に伴い2人で800万円の賃金不払いを甘受するという経験も、その前にはあるのだが。とはいえ、2人が元請から声をかけられたのは、長年の船の整備経験で技術と人脈を持っていたことに加えて、経営者としての資質があるとみなされたからだろう。こうした安定的な関係を築くことが、この兄弟にとっては上昇移動の前提条件だったことになる。

## 7. 結語に代えて

2005年の兄のアルゼンチン帰還を境として、兄弟の軌道は大きく離れていったようにみえる。それが2009年1月時点で聞き取りした印象だったが、9月に再度聞き取りしたときには両者は空間的にも物理的にも接点がないものの、同じ志向性を持っているようにみえたのが印象的だった。

弟は、別れた妻子に仕送りし続けている点を除けば、日本に住むことを決意したかのようにみえる。しかし彼は、今でも両親に小遣いをマメに送っているし、アルゼンチンへの輸出や将来的なアルゼンチンでのビジネス展開を意識して多角化を進めている。日本では家を借りているが、アルゼンチンでは4軒の家を購入して賃貸している。なおかつ、今の仕事をいつまで続けるかわからない、将来はどうか自分でもわからないという不透明な気持ちを抱えて仕事をしている、と弟はいう。祖父母の墓がある沖縄か、スペインに将来住めればいいというが、あまり具体性のある夢とはいえないだろう。

兄のほうは、十分な貯金と安定した収入のある仕事で満足しているようにみえたが、社員として出世できるところまで出世してしまうと物足りなさのほうが先立つようになった。アルゼンチンにいながらも、日本で仕事を立ち上げ伸ばしていったときの夢をもう一度みようとしている。とはいえ、今のところは家族とも別れて根のない状態にある弟と異なり、兄のほうは両親と妻子という強力な定錨によってアルゼンチンに繋留されている。2人ともが成功したという点で、本稿は我々の調査では稀な成功物語を描くことができ

た。そしてその成功体験が、さらなる起業の試みや再び起業したいという夢を通じて、離れた兄弟の意識を思いがけず近づけているのである。

## 注

- 1 2000年の国勢調査データをみると、ニューカマーのなかで韓国・朝鮮籍に続くのはパキスタン国籍で、約4分の1が自営・家族従業員となっている。2005年の集計では外国人登録者数上位11カ国しか記載されていないため、ここでは掲載できない。
- 2 本稿は、アルゼンチンからのデカセギをめぐる一連の予備的な論考の一環である。これまでの知見については、樋口・稲葉(2008a, 2008b, 2009a, 2009b, 2009c), 稲葉・樋口(2008, 2009, 2010)を参照。本稿のもととなった調査のうち、海外調査は科学研究費に、国内調査は村田財団研究助成金によっている。さまざまなご助力をいただいたH一家の皆さんの厚情と併せて、記して感謝したい。
- 3 母親とその妹にしても、夫はともにデカセギで不在であり、洗濯屋を営みながらの対応だったため、余計に大変だったと考えられる。
- 4 これはアルゼンチンのインフレ時代に購入したため安価だったのであり、地価の上があった現在では30万ドルくらいするという。
- 5 弟は学校を辞めてからも、毎週金曜日になると週末遊びに行くために小遣いを親にねだっていたという。今にしてみると、そうした甘えた生活をやめさせて自立させるために父親は日本に來させたのだろう、と弟は語っていた。
- 6 2人とも日本語はかなり流暢に話せるが、最初から湘南台の工場で働きデカセギ者のなかに隔離される生活を送っていたら、日本語がどれだけできるようになっていたかはかなり怪しい。その意味で、同じデカセギ労働のメッカといっても鶴見と湘南台ではデカセギの帰趨が大きく分岐するものと考えられる。
- 7 二世のほとんどは、日本食とアルゼンチン料理を両方食べて育ち、なかでも米飯を食べる習慣はかなり維持されている。しかし一世が沖縄出身で家で沖縄料理を食べている場合、内地の砂糖を使う味付けに慣れない二世・三世は多い。
- 8 妻は、渡日当初の日本語会話能力はほぼゼロに等しかったが、日亜学院に毎週土曜日通っていたため、簡単な読みはできる。そのため、求人情報も自ら貼り紙をみて探すことができた。
- 9 働きながら大学に通っていた兄の月給は200ドル程度であり、日本の仕事はきつかったが最初から10倍以上の給料をもらえたので文句はなかったという。

- 10 ここでいう出向とは、出向先の会社にタイムカードを置いてそこから現場に派遣されることを指し、指揮命令は完全に出向先のものとなる。しかし、雇用関係は最初の会社と結んだままとなっており、最初の会社は出向先から得る人足賃から一定額を差し引いて兄に渡す。こうした形態は、下請け関係が重層的で複雑な建設業界では普通にみられることであり、20年間ずっとこうした形態で働いている労働者もいる。この点については、たとえば筆宝（1992）を参照。
- 11 母親（元妻からすると姑）は、自分は一世代から（古い価値観を持っているから）離婚したら面白くないが、別れた妻も孫の母親なので、その後も付き合っているという。孫は特によく出入りし、日本語のテレビをみたりしている。ただし、兄の妻は別れてからも出入りすることに反対で、兄の妻がいるときには弟の前妻は両親の家に出入りしない。
- 12 このように、自分が働いていた会社が倒産したときは、従業員にとって賃金をもらえないリスクを経験する代わりに、空いたニッチに入り込み起業する機会ともなる。実際、当時鶴見で最大手だった最初の会社が倒産したときには、そこで働いていた南米出身の二世が新たに起業している。H 兄弟は、95年の倒産時には機会を生かせなかったが、これは自分の現場を指揮監督する出向先が倒産していないことによる。その出向先が倒産したときに、初めて機会が生じたといえる。
- 13 日本企業が製造した船の整備のため、マレーシアまで40日間出張したこともあったという。
- 14 兄は、日本で一番おいしい食べ物はラーメンといい、ほぼ毎日食べていたという。2009年9月に会ったときにも、アルゼンチンに日本と同じ味のラーメンがあったら100ドル出しても食べると言っていた（アルゼンチンのラーメンは、スープが薄いか麺がまずいかのどちらかで、ラーメンブーム以降急速に味が良くなった日本のラーメンとは比べるべくもない）。このように、ラーメンをもう一度食べたいというアルゼンチン人には何人も会った。
- 15 2007年に長女が生まれたため、現在は4人暮らしである。
- 16 このマンションも3万ドルで購入したのが、今では8万ドルの値がつくという。その意味で、かつてのデカセギでは数年働けばマンションを買えたのが、アルゼンチンの不動産の高騰と日本の給与減が相俟って難しくなっている。だから今はデカセギに出ても夢がないと兄は述べていたが、これはブエノスアイレス市内の話であり、今でも3万ドルあれば郊外で小さな家を購入することはできる。
- 17 とはいえ、労働時間も相当のものである。毎朝7時半には家を出て8時過ぎに出勤し、9時くらいまでは仕事をしている。土曜日も、他の人は半日で帰宅す

るが、事務仕事を片付けてから帰るため夜まで働くという。その意味で、アルゼンチンだからゆっくり働けるということではなく、それなりの所得をえるには長時間働かねばならないということでもある。

## 文献

- 樋口直人・稲葉奈々子, 2008a, 「デカセギと家族(1)——日本就労の意図せざる結果・A 家の場合」『徳島大学社会科学研究』21号.
- , 2008b, 「デカセギと家族(3)——完全な定住と事実上の定住の間・C 家の場合」『茨城大学地域総合研究所年報』41号.
- , 2009a, 「デカセギと家族(4)——日本で育った子どもが帰ってから・D 一家の場合」『徳島大学社会科学研究』22号.
- , 2009b, 「デカセギと家族(5)——一家離散と再結合の過程・E 一家の場合」『茨城大学地域総合研究所年報』42号.
- , 2009c, 「アルゼンチンからのデカセギ研究・序説——デカセギの概要と仮説提示の試み」『茨城大学地域総合研究所年報』42号.
- 筆宝康之, 1992, 『日本建設労働論——歴史・現実と外国人労働者』御茶の水書房.
- 稲葉奈々子・樋口直人, 2008, 「デカセギと家族(2)——農園維持の世帯戦略・B 家の場合」『茨城大学人文学部紀要（社会科学科論集）』46号.
- , 2009, 「デカセギと家族(6)——ミドルクラスのハビトゥスと周縁的労働力という現実の間・F 一家の場合」『茨城大学人文コミュニケーション学科論集』7号.
- , 2010, 「デカセギと家族(7)——独立への2つの道・G 一家の場合」『茨城大学人文コミュニケーション学科論集』8号.